

嬉しい事もありましたねと十二月

(渡辺 和尾)

椿が咲き始める頃、ゆつくりと一年を振り返れば、人それぞれに一年の喜怒哀楽がいろいろと浮かび上がってくるだろう。十七音の中にそれらをすべて詠み込むことはできない。どれか一つを選ぶとすれば、喜んだ事、嬉しかった事のあれやこれになるだろう。喜怒哀楽の喜を取り上げれば、残りの怒や哀や楽へは取って言及しなくてもいいのではないか、そんな気持ちになってくる。一年は喜怒哀楽の流れの中で過ぎて行くが、喜で一年を総括するのが一番自然のようである。

終の日は突然にくるあみだくじ

(宮本 めぐみ)

終の日とは尋常でない言い回しであるが、真つ直ぐその先が見えていても、直角に曲がるしかないあみだくじの進み方になってみれば、終の日であれ何であれ、ゴールはいつも突然に現れるものとなる。よくよく考えれば、どのような形の終の日であれ、あみだくじ的な突然性を確かに孕んでいることに思いつく。あみだくじのスタートの時点で、すでに最終はどの地点に行き着くのか決まっているにしても…。

人間の憎しみ笑っている銀河

(福岡 竜雄)

天の川などなかなか見られるものではないが、たまに山奥の温泉などに行くと、首筋が痛くなるほど星空を眺めている自分に気づく。満天の星はいくら見続けても飽きることがない。己が抱く憎しみ、人間そのものが持っている憎悪の感情をあつさり笑ってしまう不思議な力を天の川は持っている。見終えれば心はいぶ軽くなっていることだろう。宇宙の果ての方から、そういう効用を与えてくれる、そういう天の川なのである。

空き瓶に淋しがりの父がいる

(江尻 麦秋)

この空き瓶はアルコールの瓶を指しているのだろう。一升瓶やビール瓶、あるいはウイスキーボトルかもしれないが、飲み干して瓶も賑やかな音を立てたのだろうか。晩酌で飲み過ぎてしまい、少し悪酔いをしたのかもしれない。酩酊する父親の赤ら顔には淋しさが浮かび出ている。空き瓶を片付ける物音にも哀愁が漂う。缶やペットボトルが全盛となった今の時代に、淋しがりの父は、どういふ物音を立てて酔えばいいのだろうか。世の中のそんな移ろいを嘆きながら、更に淋しがっていることだろう。

鉛筆一本あれば私の文学よ

(小島 蘭幸)



鉛筆一本が持っている表現力とは、一体どれくらいになるのだろう。四百字詰め原稿用紙ならば何枚分になるのだろうか。文字数ならば何文字ぐらい書けるのか。ワープロならプロパティを覗けばすぐ分かるけど…。そんな余計なことまで考えてしまうと、鉛筆一本とはそういう分量的なことではなく、自分が生きてきた道、これから進んでいく先についての思いを意味していることに気がつく。鉛筆一本イコール自分そのものと理解すれば、一本の鉛筆の何と素直な形であることか。それを握った人間の背筋を伸ばして書き進めていく姿が想像されてくる。

「引用句はすべて『三省堂現代川柳鑑賞事典』(田口麦彦 編著／三省堂)から」(文&絵 三上博史&長江一彦)